

# 学習院アーカイブズ ニューズレター

# 21

Gakushuin Archives Newsletter 2023.2.17 vol.



北別館（旧図書館）書庫 解体風景 1977（昭和52）年頃

1909（明治42）年竣工。

学習院百年記念事業計画の一つ、大学文学部研究棟（北2号館）の建設決定に伴い、北別館は建物の北翼が切除され、建物全体が北北東方向に約30メートル移設された。写真は移設にあたり解体された付属の書庫である。当初の佇まいは、右下の建物全体写真赤枠部分で確認することができる（『大礼奉獻学習院写真』1915（大正4）年）。（共に学習院アーカイブズ所蔵）

## Contents

学習院初等科における自校史教育の現状と課題

学習院初等科 教諭 大矢 幸久 ..... 2

「スクール・オブ・ガヴァメント」の行方

学習院アーカイブズ 桑尾光太郎 ..... 4

アーカイブズ資料を外部倉庫で保管するということ

学習院アーカイブズ 小根山美鈴 ..... 6

主な活動（2022年7月～2023年1月）

..... 8

# 学習院初等科における自校史教育の現状と課題

学習院初等科 教諭 大矢 幸久



## 1. はじめに

私立学校において自校史教育は重要である。建学理念の実現と継承、その現代的な位置付けの検証、授業実践の方向性の評価・確認、児童生徒・教職員のアイデンティティの確立、愛校心の涵養といった教育的効果を持つためである。特に私立小学校では、学校所蔵の歴史資料を用いて、創立者の教育理念や学校の歴史を学ぶ授業が積極的に実施されている（例えば、慶応義塾横浜初等部の「福澤先生の時間」など）。本院においても、開院150周年に向けて、アーカイブズを効果的に活用した魅力ある自校史教育の在り方について検討することが求められよう。本稿では、その議論の一助となるべく、学習院初等科における自校史教育の一端を報告するとともに、さらに魅力ある教育活動を展開する上で検討すべき今後の課題について述べる。

## 2. 社会科「私たちの学校のうつりかわり」の授業実践例

本校において学校の歴史を学ぶまとまった機会として、第4学年の後半に実施される社会科授業単元「私たちの学校のうつりかわり」が挙げられる。これは学習指導要領では扱わない初等科特設の学習単元である。学習内容は、初等科独自に編纂した副読本『学習院初等科のあゆみ』（写真）に概ね基づくが、各年の社会科授業担当者の裁量に任されている。

表1は、筆者が平成26年2～3月に実践した授業の概要である（当時は第3学年3学期にて実施：全9時間扱い）。子どもの歴史意識の発達段階を踏まえると、この学年で通史を学習するのは困難である。そのため、本授業では、学校に関わる具体的なひと・もの・ことを手がかりにして、過去と現在の初等科生活の共通点や相違点、大まかな時代の移り変わりや受け継がれている理念・価値を捉えられるように単元を設計した。例えば、明治天皇や乃木希典、安倍能成などの人物を通して、学習院の歴史や伝統、大切にされてきた価値観などに触れる学習を組み込んだ。また、単なる個別的・羅列的知識の注入や暗記に陥らないように、子どもの興味や関心を活かしながら問題解決的に問いを立てて学習を進められるように配慮した。学校の見慣れた風景や日常生活の中から問いを設定し、それを追究することで、身の回りに初等科の歴史に関わる事象で溢れていること

に気づき、学校に対する見方や考え方を深められるようにした。

授業で用いた資料は、副読本に掲載されている写真や絵画・文書資料を基本とした。これらは、学習院院史資料室（現学習院アーカイブズ）所蔵資料、『学習院百年史』、学校文集『小ざくら』（大正15年創刊）などより転載して編集したものである。加えて、副読本だけでなく、初等科図書館所蔵の『小ざくら』、『初等科だより』（昭和29年～）、卒業アルバム（昭和27年～）のバックナンバーや『学習院百年史』などから、授業で有効に活用できそうな資料を検索し、子どもの発達段階を踏まえて教材化を行った。特に『小ざくら』は、時勢を反映した表紙絵、学校生活や行事の写真、子どもの作文などから当時の学校生活をありありと感じ取れる資料が豊富に掲載されており、授業づくりにおいて有用であった。

紙資料だけでなく、実物教材も積極的に活用した。昔のランドセル、皇族使用の椅子・机、戦前の教科書、『小ざくら』、教官服などを教室に搬入し、子どもの目の前でじっくりと観察させた。直感的に過去と現在の違いや関連を考えさせる上で有効であった。男子が着用している正服・正帽（冬服）は、明治期からほとんど変更されていないため、日常生活の中に学習院の伝統が息づいていることを実感する良い教材となった。

授業後に書いた子どもの学習感想には、「自分たちが通う学校にはこんなに長い歴史があるとは知らなかった」という記述が多く書かれていた。日常生活の場としての学校を異なる視点から捉えることができたようである。意図的・計画的に自校史を学ぶ機会を設定することの重要性が示唆された。



写真：社会科副読本『学習院初等科のあゆみ』（表紙とp.6）

表1 第3学年社会科授業「私たちの学校のうつりかわり」の概要（平成25年度3学期）

時	■主な発問・学習活動	○資料
1	■なぜ低い丘なのに「二百三高地」と呼ばれているのだろうか。 ・「立太子禮奉祝記念碑」とお手植えの記録から、「二百三高地」と呼ばれる場所の意味を考える。	○バスケットコート奥の通称「二百三高地」の写真、○立太子禮奉祝記念碑、○皇族の方によるお手植えの記録（『初等科だより23号』）
2	■なぜ本館の壁は分厚く、地下に防空室があるのだろうか。 ・本館の建築様式や設備、本館が建てられた経緯や当時の社会状況について調べる。	○本館竣工当時の写真、○本館の設備・特徴、○本館が完成した時の初等科生の作文（『小ざくら』）
3	■勅額には、どのような願いが込められているのだろうか。 ・学習院創立時の様子、勅額が下賜された経緯について調べる。 ・華族に対する勅諭から、学習院創立に際しての明治天皇の考えや願いについて考える。	○勅額の写真、○学習院開業式の錦絵、○孝明天皇・明治天皇の肖像画、○明治4年10月22日の勅諭（「今我国、旧制を更革して列国と並馳せんと欲す、国民一致、勤勉の力を尽すに非れば何を以て之を…」）、○旧本館玄関上に掲げられた勅額の写真
4	■初等科の中で一番古いものを探しに探検に出かけよう。 ・初等科内に残された古いものを見学して、それぞれの設置年、由来や逸話について調べる。	○各種写真（旧本館、旧正堂、旧正門、昔の大いちょう、門衛所）、○山岡鉄舟の書、※探検コース：大いちょう→山岡鉄舟邸にあった祠→二百三高地と立太子禮奉祝記念碑→皇紀二千六百年記念碑→近光園標柱→東門→門衛所→正門→正堂・勅額→地下防空室
5	■今と昔の初等科生の生活を比べよう。 ・映像や写真、学校文集などの資料から、昔の初等科生活の中で、今の初等科生活にも残っているものを調べる。	○昔の運動会・朝礼の写真（昭和37年卒業アルバム）、○学習院輔仁会映画研究会制作動画『学習院初等科の生活』（昭和32年・18分間）、○当時の年間行事予定表（小ざくら）
6	■なぜ院長先生や先生方の服装が軍服から背広に変わったのだろうか。 ・大正期と1950年頃の教職員の集合写真、歴代の院長先生の変遷から、戦前から戦後にかけての初等科の変化について調べる。	○歴代院長のプロフィール、○卒業アルバムの教員集合写真、○学校文集『小ざくら』の表紙一覧、○女子の正服の変遷、○本居宣長の和歌、○戦前と現在の『小ざくら』に記された六年生の将来の夢、○正服、正帽、桜の徽章、ランドセルの由来について
7	■乃木希典院長先生は初等科生にどんな子になってほしいと考えたのだろうか。 ・年表や読み物から、乃木先生の人物像を調べ、「質実剛健」の意味について考える。	○乃木希典の肖像、○戦前の切手、○乃木院長先生の年表、○乃木希典の伝記、○「乃木院長訓示要項」、○「質実剛健」の意味、○游泳や剣道と乃木院長先生とのつながり、○片瀬江ノ島游泳時の集合写真、○乃木館の写真、○昭和13年の『科訓』
8	■安倍能成院長先生は初等科生にどんな子になってほしいと考えたのだろうか。 ・院歌をもとにして、終戦後の学習院の変化を捉え、安倍先生の思いや願い、「正直と思ひやり」の意味について考える。	○学習院院歌の歌詞、○安倍院長の年表、○小ざくら所収「学習院院歌の解」（昭和26年）、○安倍先生が書かれた書（「正直第一」）、○安倍先生が残された言葉
9	■学習院初等科のあゆみを年表にまとめよう。 ・初等科の出来事、家族の生年、社会の出来事を大まかに整理する。	○初等科卒業生や家族へのインタビュー、○初等科の年表、○これまでの授業で配付された資料

（筆者作成）

### 3. 今後の課題

平成24年から始められた学習院アーカイブズの初等科所蔵資料調査作業により、数多くの貴重な資料群が確認された（詳細はニューズレター14号を参照）。作業は現時点でも継続中であり、魅力的な資料が相次いで発見されている。こうした成果を踏まえ、初等科における自校史教育をさらに充実させる上での今後の課題について3点述べる。

#### 1) 初等科所蔵資料の整理・保管

多くの資料は、温湿度管理のない古いキャビネットに長期間詰め込まれていたため、経年による紙質の変化、カビや虫害の影響により損傷が進んでいる。調査を終えた資料は中性紙の保存箱に保管され、ある程度空調の効く部屋に格納されている。しかし、資料の劣化や破損、散逸を防止する環境としては不十分である。

#### 2) 教育活動への利用促進

近年の調査成果を踏まえた教育実践を行いたい。しかしながら、教材化に向けて、資料の記述内容を吟味・検証したり、授業の目的や発達段階にあわせて資料を教育的に加工したりする作業は進んでおらず、授業での活用のハードルは高い。社会科を専門としない教員にも教育の様々な場面で所蔵資料を有効活用できるように、副読本の改訂や図録集・教材

集の作成、資料のデジタル化などを進めることが必要である。

#### 3) 資料展示の在り方

学習の機会が限定される社会科授業以外でも、所蔵資料の効果的な活用方法を検討したい。「伝統校」と呼ばれる他の小学校に出かけると、学校の創立や沿革、過去の学校生活の様子をわかりやすく展示した校歴史室を目にすることが多い。その中には、資料の見せ方など展示方法が工夫されていて、外部の者でもその学校の魅力を窺い知ることができるものがある。しかし現在、初等科ではそうした施設や場所はない。常時、初等科の歴史を展示できる空間の整備が必要ではなからうか。日常の教育活動に資するだけでなく、学校行事や学校説明会の際に学習院の魅力を発信する場ともなりえる。

上記の1)と3)については、学習院VISION150事業の一環として、令和9年度を目標に、初等科所蔵資料の収蔵庫及び資料展示室の整備計画が開始された。課題改善に向けて、院内の関係部署との連携や協働を図りながら資料の有効活用のあり方について検討を進めていきたい。初等科の有する「宝の山」をいかに有効活用していくべきか、その道を探っているところである。

# 「スクール・オブ・ガヴァメント」の行方

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

## 1. スクール・オブ・ガヴァメント構想の提示

「スクール・オブ・ガヴァメント」(以下SOG)とは、学習院が宮内省の管轄から独立し存続を図ろうとした1946(昭和21)年9月、CIE(GHQ民間情報教育局)側から新学習院の教育の特色として示唆された構想である。9月5日、山梨勝之進学習院長がCIEを訪問し、高等教育政策を統括していたウィグルスワース中佐(Lt. Col. Edwin F. Wigglesworth)・CIE教育顧問であったデルレ博士(Dr. Arundel Del Re)との間で「特色ある私立学校」について意見を交換した際、山梨にSOG構想が示された。山梨は最初その意味を「school supported by the government」と解釈したが、それが「school of government science」であることを了解し、大いに賛意を示したという。

山梨とCIEとの協議が重ねられた後、9月13日には卒業生有志とCIEとの懇談が行われた。CIE囑託として一連の交渉に同席し通訳もつとめた宗武志(そう・たけゆき 1908～1985)が、学習院百年史編纂のため1974(昭和49)年に「一九四六年九月の会話—学習院の変貌とそれに立



図1：宗武志「一九四六年九月の会話」(学習院アーカイブズ所蔵)

会った二人の外国人教師—」【図1】を寄稿している。宗は学習院高等科を経て東京帝国大学文学部英文学科に進学し、デルレ博士の教えを受けていた。「一九四六年九月の会話」によると、懇談の席上ウィグルスワース中佐から次のような説明があり、卒業生と意見の一致を見たという。

初等科から大学程度までの一貫した課程を備え、民主的な理念と組織に基づいて特別に政治的技術(the art of government)の訓練を受けた、教養の高い人物を養成するための教育を行い、大学の四年間は政治の知識と実際を教える政治科学

(government science)を専攻し、大学院はさらに外交その他に専門化する。

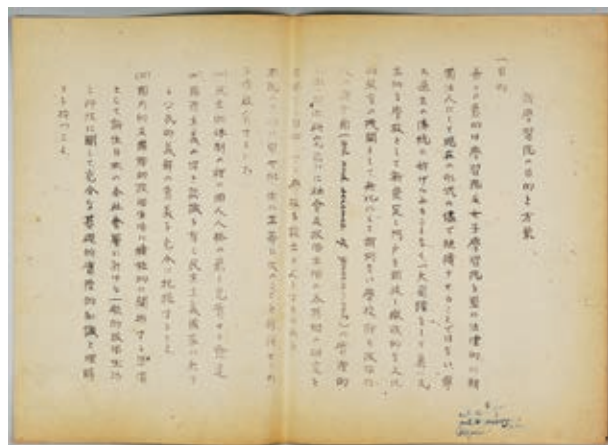


図2：「新学習院の目的と方策」(学習院アーカイブズ所蔵)

その後学習院は9月30日付で「新学習院の目的と方策」をCIEに提出し【図2】、新たな学校の目的に「政治行政の諸方面(art and science of government)の実際の及学問的研究並びに社会及政治生活の各様相の研究」という、SOGの理念が盛り込まれた。同文書では、財団法人化を機に形式だけではなく中身も新しい学校に生まれ変わることが強調され、文中には「民主的」「平等」「進歩的」といった戦後民主主義を象徴する言葉が頻繁に使用されている。何としても学習院を存続させるのだという、強い意気込みを感じさせる文書である。

## 2. 大学の開学とSOG

「政治行政に於ける研究および指導者の養成」を目的とする以上、高等教育機関つまり大学の設置が想定される。当時ウィグルスワースは新制大学の制度設計を担当しており、「一九四六年九月の会話」には、ウィグルスワースから宗武志に示された学科目設置メモも収録されている。学習院アーカイブズに残される大学の最も早い時期のカリキュラム案は、1946年12月12日の日付が記された「大学科学科目表」で、SOG構想を反映して政治学をはじめ社会科学系の学科目が列挙されている(拙稿『「財団関係資料」—私立学習院を支えた人たち』『学習院アー

カイブズ・ニューズレター』17号参照)。

1947(昭和22)年4月、財団法人として出発した新学習院は、安倍能成院長を中心に大学開設に向けての準備を進めた。同年9月から10月にかけて「教育委員会」において大学開設の基本方針が議論され、10月11日の第3回委員会で配付された「学習院大学科設置要項」には目的が次のように記されている。

本院大学科は高等な理論的、实际的知識及び教養を涵養し、独創的思考及び研究を奨励し、特に政治、行政、文化に関する歴史並びに理論の究明とこれが実践とによつて社会に奉仕する人材を育成することを目的とする。

1948(昭和23)年4月には、大学設置準備委員会が設置されるとともに理事会において大学設置方針が正式に決定された。ここでSOGをいかにして新設大学に具現するかが改めて問題となった。つまり学内の教員間ではSOG自体の意味するところが不明確だったのである。準備委員の一人だった櫻井和事教授は、後年次のように述べている。

大学をいよいよ作るという二十三年になって、(中略)じゃ何を作るかという時に、スクール・オブ・ガヴァメント…。スクール・オブ・ガヴァメントって何だと言ったら、誰もわからない。その内、たぶん政治学科みたいなものだろうということになった。学習院も昔から、そういう風な大学科を置いて外交官を作るとかなんかやったことが明治二十年代に二回ありましたね。たしか、富永(惣一教授・引用者注)君の主張だったと思いますが、そういう昔からの伝統に合致しないでもないからスクール・オブ・ガヴァメントというやつでいこうと…。その“やつ”がちっともわからない(『大学文学部』関係座談会)1975年 学習院アーカイブズ蔵)。

結局、SOGの具現化は政治学科の設置という形に落ち着き、1949(昭和24)年4月、政治学科・哲学科・文学科からなる文政学部と、物理学科・化学科からなる理学部という編成で学習院大学が開学した。第1回入学要項に掲載された安倍院長による「学習院大学設立趣意書」にSOGに関する言及はなく、その後SOGが改めて検討される機会はなくなった。1952(昭和27)年に占領が終結しCIEの存在を気にする必要がなくなったこともあるが、同年に経済学科が増設されて文政学部が政経学部(政治学科・経済学

科)と文学部に改組されると、経済学科に多くの志願者が集まり、また大学の発展に従って学部学科が細分化していったことが大きい。1954(昭和29)年の政経学部教授会で、政治学科に比べて志願者数の多い経済学科の入学定員を増員し、政治学科を200名・経済学科を300名とする案が審議された際、政治学科の教授からSOGの理念によって政治学科は大学の中心であるべきで、経済学科の定員数が政治学科のそれを上回ることに反対との意見がでた。これに対して安倍能成学長は、定員を変えるからといって政治学科を軽視するわけではないと断りながらも、次のように述べている。

私は、最初スクール・オブ・ガヴァメントという案を出されたが、私自身ははづかしいことだが、どういう風にやってゆくか不明であった。その後もこれを特に研究することなく、旧来の政治学科の形の上に不完全なもの、在り方であった。で、この名前に拘泥する必要はないと思う(『政経学部教授会議事録』1954年11月16日)。

続いて北山富久二郎経済学科主任も、「政治学科の定員を減らす問題ではないから、直接スクール・オブ・ガヴァメントの色彩を減ずることにはならない。また経済学科に関するかぎり出発時以来そのような制約があるとはきいていない。就職の状況をみても政治、司法畑にゆくものは稀の様である」(同前)と発言している。北山は1952年の経済学科発足にともない学習院大学に着任し、CIEとの学習院存続交渉のなかでSOGが検討された経緯を知らなかったと思われる。結局SOGの理念は形骸化し、政治・行政の指導的人材の養成は学習院大学の特色とはならなかった。

## おわりに

宗武志は「一九四六年九月の会話」の「あとがき」で、「華族学校、華族女学校として出発した学習院にとって、一九四六年前後の経験はまことにただならぬものであったに相違ない。関係者の努力は稔って、学習院はみごと生き残り、生きのび、あまつさえ甦生したと言うべきであろうか。政治学部という性格づけがたとえ一時の方便として顧みられなかったとしても、それを責める必要はあるまい」と記している。「たとえ一時の方便」であったにせよ、「スクール・オブ・ガヴァメント」は学習院の戦後の再出発ならびに学習院大学の開学に大きな役割を果たしたといえよう。

# アーカイブズ資料を外部倉庫で保管するということ

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

## 1. 2023年度は事務室の移転と改修

学習院アーカイブズは、事務室の北別館への移転と、現在の事務室<sup>1)</sup>のフロア全体を完全収蔵庫化するための改修工事を控えている<sup>2)</sup>。今までは、①当室が所蔵するアーカイブズ資料の収蔵棚、②職員の事務、③利用者の閲覧、の3エリアが明確に区分されず、いわば資料に埋もれた「書斎部屋」のようであった。これはアーカイブズ資料にとって保存に適さない環境であり、資料の収集・受入、整理、保存、利用（公開）という一連の業務を効率的に遂行できないことも意味していた。最大の課題は、将来的にアーカイブズ資料となる各部署からの移管文書を収蔵できるスペースが全く無いことだった。

これらの課題を少しでも解決するために、事務機能と収蔵機能の分けを計画したところ、別々の建物の中でそれらを機能させることで実現した。改修工事の間、アーカイブズ資料をキャンパス内の別の場所に置くこともままならなかったことから、一時的に外部倉庫へ移動させる必要が生じた。これは、当室にとって初めての試みであると同時に、思い切った選択でもあった。本稿では、外部倉庫への搬出に至る業務を中心に、汗と涙をまじえつつ振り返ってみたい。

## 2. たかが搬出、されど搬出

### (1) 搬出前夜その1（アーカイブズ資料の準備）

アーカイブズ資料の搬出はまだ進行中である。2022年8月に1回目（全体の約70%）を終え、2023年2月の2回目で完了する。最終的な搬出数は約800箱になる見込みである。

体系的な目録作成を開始した2020年度<sup>3)</sup>より、既に移転や改修計画を視野に入れており、2022年度に事業が本格始動してからは、整理・未整理問わず、「資料群（まとまり。集合物）」単位のリストを作成することに専念した。これは、受け入れる前段階において文書を作成・管理していた人々がつくった配列や分類を、他所の文書と混ぜることなく、極力そ

のまま保持するアーカイブズ学の原則に従ったものであるが、搬出の準備業務においては、この原則が有効に働いたのである。

結果、資料群数は504件（2022年度現在）となり、数万点に及ぶ資料をコンパクトに、かつ秩序を崩さず管理できるようになった。ただし、図書・刊行物、物品資料については1点単位のリストを作成した。

他方、事務機能および当室職員の北別館への移動は、2023年5月を目処に準備が進められている。北別館は1909（明治42）年築の木造建築物であり、耐火・耐震等への懸念から、アーカイブズ資料を永久保存するには適切でない。したがって、外部倉庫へ搬出する資料とは別に、収蔵庫が完成するまでの期間のみ、通常業務において利用頻度の高い資料や劣化のはげしい写真フィルム、そしてデリケートな媒体のガラス乾板等を、北別館で一時保管するために選出した（約80箱分）。



図1：軸物を整理するアルバイトの大学院生

## (2) 搬出前夜その2 (外部倉庫会社との連携)

2021年度の次年度予算要求の末、外部倉庫会社には株式会社ワンビシアーカイブズ（現株式会社NXワンビシアーカイブズ<sup>4)</sup>。以下、「ワンビシアーカイブズ」と称する）が選定された。ワンビシアーカイブズは、書類保管や記録メディアのデータ復旧等に関するサービスを始め、電子契約サービス等のデジタル領域に関するソリューション提供、細胞・検体保管サービスなど幅広く手掛けている企業である。2022年度よりワンビシアーカイブズと当室とで具体的な打ち合わせを開始し、アーカイブズ資料の梱包・移送、保管場所での管理に関する詳細を決めていった。現地にも足を向けた。

最も打ち合わせを要したのは、契約締結のために必要な各種契約書及び仕様書作成と、運送・保管中の保険加入についてであった。門外漢の筆者は、わからないことを容赦なくワンビシアーカイブズにぶつけたが、都度親身になって丁寧に応対下さった。

8月に8日間かけて行われた搬出作業では、文書資料についてはワンビシアーカイブズが、物品資料については日本通運株式会社の方々にご担当いただき、無事に終了した。迅速かつ確かな動作に感心しきりであった。この場を借りて感謝を申し上げたい。



図2：日本通運の方々によって梱包中の  
「皇太子明仁親王高等科在学中御使用の机・椅子」

## 3. 外部倉庫保管の今後

アーカイブズ資料を組織の手元から離し、外部倉庫で保管することは、それが一時的なものであったとしても危機感を覚える。これは多くのアーキビストに共感されよう。なぜなら、アーカイブズは資料が物理的に存在してこそ成り立つ業務であるためだけでなく、資料を保有する施設そのものが、組織の歴史的価値を可視化させ、遺産としての重要性を象徴するからである。

一方で、年々増える資料に対してスペースが不足する課題を恒常的に抱えている。学習院アーカイブズも、改修工事後またすぐに収蔵庫が満杯になるだろう。その場合に外部倉庫という選択肢をどう捉えるか。今回の搬出業務において多くの方々からご協力をいただき、知識や理解を深めるなかで、先述の危機感は単なる一アーキビストとしての杞憂なのかという思いも芽生え、大いに考えさせられることとなった。

改修工事後、2024年2月に外部倉庫よりアーカイブズ資料の大半を当該収蔵庫に戻す予定である。2023年度は閲覧を希望される方への対応に遅れを生じる可能性がある。事前に学習院アーカイブズへご連絡いただけると幸いである。

### 【謝辞】

院外では、弁護士であり東洋大学教授である早川和宏先生、かつて大掛かりな改修工事に伴う業務を行われた埼玉県立文書館の太田富康先生に、契約や搬出について多くのアドバイスをいただきました。院内では、学習院女子大学岩淵令治教授、同大学李範根副手、大学史料館学芸員皆様、そして、作業のための施設利用等にご対応いただいた施設課皆様、当日もしもの怪我やコロナ感染等のための受け皿として快くご承諾いただいた大学保健センター皆様に御礼を申し上げます。

1) 現在の事務室は西5号館（本部棟）地下1階。こちらを収蔵庫にするための改修工事が予定されている。  
2) 2022～2027年度中期計画「学習院VISION150」による事業。以下の学校法人学習院ホームページを参照。<https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/kikaku/operation.html>（最終アクセス日：2023年1月5日、以下同じ）  
3) 拙稿「学習院アーカイブズの10年、これからあるアーキビストの視線―」『学習院アーカイブズ・ニューズレター』19号（2022年）参照。  
4) 株式会社N Xワンビシアーカイブズホームページ <https://www.wanbishico.jp>

## 主な活動（2022年7月～2023年1月）

### ◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別（15部署）

### ◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理

- ①初等科所蔵資料（7月、12月）



### ◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③自動演奏ピアノの維持管理
- ④劣化資料に対する保存修復

### ◆資料等のデジタル化

- ①「雑件録」（明治42年～大正元年）の件名目録作成
- ②アドミッションセンター移管ポジフィルム（1990～2000年代）

### ◆資料の受入れ

- ①錦絵「学習院開業式図」（明治10年）



- ②「進駐軍」兵士と中等科学生集合写真（昭和20年）

#### ～北別館こぼれ話 - 表紙の写真より～

数度の改修を経て、今なお教育・研究の場として活躍し続ける北別館であるが、2023（令和5）年中には、学習院アーカイブズの事務室移転先として、新たな歴史を刻もうとしている。2019（平成31）年の耐震・改修工事の様子については、『学習院アーカイブズ・ニュースレター』16号（2020年）参照。

- ③乃木希典院長写真及び銀細工写真たて



- ④近藤不二資料
- ⑤全学共闘会議ビラ・資料（1969年頃、主に哲学科共闘会議）



### ◆講演会、教育・広報支援等

- ①大学史料館展覧会「ある皇族の100年—三笠宮崇仁親王とその時代—」（10月1日～12月3日）への協力
- ②文学部史学科専門科目「アーカイブズ学演習」への協力
- ③幼稚園教員園内研修「学習院および学習院幼稚園の歴史」（1月18日）
- ④初等科父母会総会講演「日本近代史の中の学習院初等科一所蔵資料の調査から」（1月24日）

学習院アーカイブズ・ニュースレター第21号  
2023（令和5）年2月17日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ  
Gakushuin Archives  
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1  
TEL 03-5992-1285（直通）  
事務室 西5号館（本部棟）地下1階  
<https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/index.html>